

II-1 国語科

(1) 研究仮説

ICT を活用して言語活動を行うことで、キーワードを軸に論を展開させる方法について効果的に理解し、より深くテーマを考察させることができるため、「問う力」の育成に繋がるだろう。

(2) 実践

ア 実施日時 令和2年11月16～20日

イ 実施場所 2年A組教室

ウ 参加生徒 2年A組生徒

エ 行程

① Google フォームやスプレッドシートでの共有情報をもとにした簡易ディベートを行う。

② Google ドキュメントの共同編集を活用したグループ単位での作問作業を行う。

オ 実施内容

次	時	主な学習活動	指導上の留意点
1	1	●意味段落単位で区切って通読して本文の論理展開を確認し、理解に関するアンケート結果をもとに自分の考えを話し合う。 (1)意味段落ごとに黙読後、ペアで内容の確認・板書解説。 (2)Google フォームを開かせアンケート回答。結果をプロジェクターで表示し、感想を話し合わせる。 (3)アンケートの問いを指定し、ペアで立場を決めてミニディベート。	○文字を追わず、論理を追えるよう、因果関係等について解説し論理的思考を促す。 ○アンケートの選択肢を2択にして、それぞれのメリット・デメリットについて考えさせる。 ○感想を言い合うことで、多様な視点を持たせる。 ○ペアなのでジャッジはつけない。相手を納得させられるように発言内容を工夫するよう指示。
2	2	●本文中のキーワードについてメリット・デメリットを全員で共有し、ジャッジをつけたミニディベートを通して、より説得力のある発言方法について考える。 (1)本文の構成を確認し、「文明化」「メディア」のそれぞれの発展がもたらすメリット・デメリットについてノートに整理。 (2) Google スプレッドシートを開かせ、共同編集で指定の記入欄に入力し、他の人の記入内容も同時に共有。 (3)他の意見も参照しながら、4人グループでミニディベート。ジャッジは2人で、攻防1回ずつ。2つ目のテーマでは発言者を変えて実施。	○自分たちの意見がそのままディベートの参考資料一覧になる旨を伝え、多様な視点で考えるよう指示。 ○共同編集の注意点を確認。セル内に表示できる程度の字数で端的な表現を促す。 ○スプレッドシート上の一覧を参考に、掘り下げた主張・反論を発言できるよう机間指導。
3	3	●グループで本文の展開について話し合い、根拠を踏まえて選択問題を作成する。 (1)展開図を書き込んだ本文プリントを配付し、論理のつながりを全体で確認。 (2)4人グループになり、班ごとに意味段落1つを割り当て、役割分担の後に傍線部の選定から選択肢の完成までを話し合わせる。 (3)班ごとに作成しておいた Google ドキュメントのファイルにそれぞれログインさせ、共同編集で〔設問・選択肢〕を記述させる。 (4) Google フォームによる簡易ループリックで自己評価・振り返り。	○作問に際して、文ごとの同値・対立・因果関係を可視化することで解答作成上のヒントとするよう促す。 ○普段の授業で同値・因果のつながりを中心に学んできたことを思い出させ、一か所の抜き出しで解答を決めないように議論を進めさせる。 ○見ているだけの生徒が出ないように、正解選択肢を決めるまではグループワークとし、一人一つ間違いの選択肢を考えるよう指示を出し、全員参加させるようにする。 ○自己評価の重要性を説明し、今回の授業での達成度について考えさせる。

(3) 評価

ア 参加生徒の反応

「科学・技術と生活空間」自己評価アンケート回答結果（A組35名）		
1 課題設定について	(評価)	回答率(%)
社会の現状について、メリット・デメリットを踏まえて我々が見直すべき課題を明確にすることができた。	S	20.0
社会の現状について、メリット・デメリットを踏まえて我々が見直すべき課題について考えることができた。	A	48.6
社会の現状について、メリット・デメリットを踏まえて考えることができた。	B	22.9
社会の現状について、考えることができた。	C	8.6
2 情報の収集について	(評価)	回答率(%)
テーマ（文明化・メディア・作問等）について、周りの意見にしっかりと耳を傾け、自分の考えを深め視野を広げることができた。	S	34.3
テーマ（文明化・メディア・作問等）について、周りの意見にしっかりと耳を傾け、自分の考えを深めることができた。	A	45.7
テーマ（文明化・メディア・作問等）について、周りの意見も聴きながら議論することができた。	B	17.1
テーマ（文明化・メディア・作問等）について、議論することができた。	C	2.9
3 整理・分析について	(評価)	回答率(%)
テーマ（文明化・メディア・作問等）について、議論を通して自分の考えを整理し、明確な結論を導き出した。	S	34.3
テーマ（文明化・メディア・作問等）について、議論を通して自分の考えを整理し、結論を導き出すために考えることができた。	A	37.1
テーマ（文明化・メディア・作問等）について、議論を通して自分の考えを整理することができた。	B	17.1
テーマ（文明化・メディア・作問等）について、議論を通して考えることができた。	C	11.4
4 まとめ・表現について	(評価)	回答率(%)
テーマ（文明化・メディア・作問等）について、結論に至るまでの論理が矛盾なく一貫性を持ち、分かりやすく発表・記述することができた。	S	34.3
テーマ（文明化・メディア・作問等）について、結論に至るまでの論理を一貫性を意識して、分かりやすく発表・記述することができた。	A	31.4
テーマ（文明化・メディア・作問等）について、結論に至るまでの論理を、分かりやすく発表・記述することができた。	B	25.7
テーマ（文明化・メディア・作問等）について、結論に至るまでの論理を、発表・記述することができた。	C	8.6

(参考) Google フォームによるアンケート

イ 成果と今後の課題

〔成果〕

普段の口頭での説明が多い授業に比べて、意欲的に取り組む生徒が多かった。ICT ツールを使用する際には作業を単純化・細分化し、それらを最後につなげていく形式を取る方が効率良く、生徒にとっても思考の対象が明確になるため、考えやすくなる面があると思う。また、一人ひとりの入力状況がリアルタイムで可視化されるので、取り組まざるを得ないといった消極的な要因も働いているようである。

〔課題〕

- ・議論の時間の確保を優先したので、本文の解説に充てる時間が短くなってしまった。反転授業も取り入れて、事前に本文の要点を説明した動画等を配信したうでの展開も今後視野に入れたい。
- ・スマホでの文字入力、予想以上に時間がかかった。BYOD を見据えると、フリック入力・画面上のキーボード入力(片手)・物理的なキーボード入力(両手)等が混在する中で、用途に合わせたツール選択が重要になってくる。これは教員1人の経験則のみで解決するには非常に大きな労力がかかるので、学校全体での情報共有等が必須であると考えます。
- ・Wi-Fi 接続にトラブルがあり、スクリーン表示が出来ず間延びしてしまうなど、接続不良ひとつで授業展開自体に大きな変更を強いられる危険性があることを頭に入れておかねばならない。個々の教員のICTリテラシーに左右されず、誰でも円滑にICTを活用できる体制づくりは学校全体・教科全体で取り組んでいかねばならない。
- ・Google Classroom のループリック機能は、教員からの評価用には非常に便利だが、自己評価用の機能はついていないので、Google フォームで作成せねばならない。教科内でフォーマットを共有・引継ぎできる体制づくりが重要となる。また、Google 系のツールは縦書きが出来ない。国語科として活用するには非常に大きな制限を強いられてしまう。今後のアップグレードに期待したい。

II-2 高校・地歴公民科

(1) 研究仮説

社会的事象に対する『問い』の立て方について、荻谷剛彦氏はその著書（次頁(4)参考文献参照）で具体的な事例を紹介している。それは、次に示すように『問い』を（ア）と（イ）の２種類に区分し、この２種類の『問い』を使って（ウ）のように展開することにより、「新しい問い」の発見に到ることが出来るというものである。この手法を用いることにより、社会的事象に対する興味関心を高めさせ、主体的に課題を発見出来るなど、『問う力』を育むことが出来るであろう。

（ア）実態を問う『問い』＝「〇〇はこうなっているのか」

この『問い』は「〇〇はこうなっている」という解答を期待する。答え探しの発想に基づく場合が多く、事実を確認出来る『問い』ではあるが、主体的に考えることには結びつきにくい。

（イ）更なる考えを誘発する『問い』＝「なぜ〇〇は△△なのか」

この『問い』は「なぜなら□□～」という解答を期待する。社会的事象の因果関係を探ることは、深く考えることに結びつく可能性がある。「なぜ」に対する「なぜなら～」の仮説を立てつつ社会的事象の背景にある因果関係を予測し、主体的に考えることを誘発する『問い』である。

（ウ）更なる考えを誘発する『問い』の間に実態を問う『問い』を挟む

「なぜ〇〇は～」の『問い』でも、もっともらしい「答え」を見つけて納得し、そこで止まってしまうと主体的に考えることにつながらない。そこで、「なぜ〇〇は～」の『問い』の主語（〇〇の部分）を分解したうえで「〇〇はこうなっているのか」という問いへと分け、さらにそこから、また新たな「なぜ◇◇は～」を導いていくやり方で問いを展開していくと「新しい問い」の発見にいたることが出来る。

(2) 実践

ア 実施時期 令和２年９月中旬～下旬

イ 対象生徒 第３学年文系クラス（Ｅ組，Ｆ組，Ｇ組 １１０名）

ウ 実施内容 『政治・経済』『現代の国際政治』分野

次に示す Step1～Step3 をワークシート（図２参照）を用いて個別学習で進めた。（図１参照）

Step1 「更なる考えを誘発する『問い』を立てる

Step1-1 該当分野から興味関心の深い社会的事象を選択し「なぜ〇〇は△△なのか？」と問う。

（以下、下線付ゴシック文字で、実際の授業で一人の生徒が立てた『問い』を記載した）

「なぜエジプトやリビアなどは『アラブの春』で独裁政権が崩壊した後も政権が安定しないのか。」

Step1-2 『問い』を解決するための必要事項を資料集，電子辞書，ネット検索等で調べる。

Step1-3 『問い』の答えを「なぜなら～」の形にして 80 字以内*1 で要約する。（15 秒で発表*2）

「なぜなら新政権が発足しても、政情が不安定で、さらに軍による介入によって真の民主化と安定化までの道のりは厳しいものになってしまったから。」

*1：「80 字以内」での要約は，中島博司氏（「Find アクティバレーナ」参加）の「R80」を参考にした。

*2：「15 秒で発表」は，齋藤孝氏の著書（次頁(4)参考文献参照）を参考にした。

Step2 Step1 で立てた『問い』の主語を使って「実態を問う『問い』を立てる

Step2-1 Step1 の「なぜ〇〇は□□なのか？」の主語を使って次のような問いを立てる。

「〇〇はこうなっているのか」（～どんな状況にあるのか，～どんな課題があるのか，等々）

「エジプトやリビアはどのような現状にあるか。」

Step2-2 『問い』を解決するための必要事項を資料集・電子辞書・ネット検索等で調べる。

Step2-3 『問い』の答えを 80 字以内で要約する。（15 秒で発表）

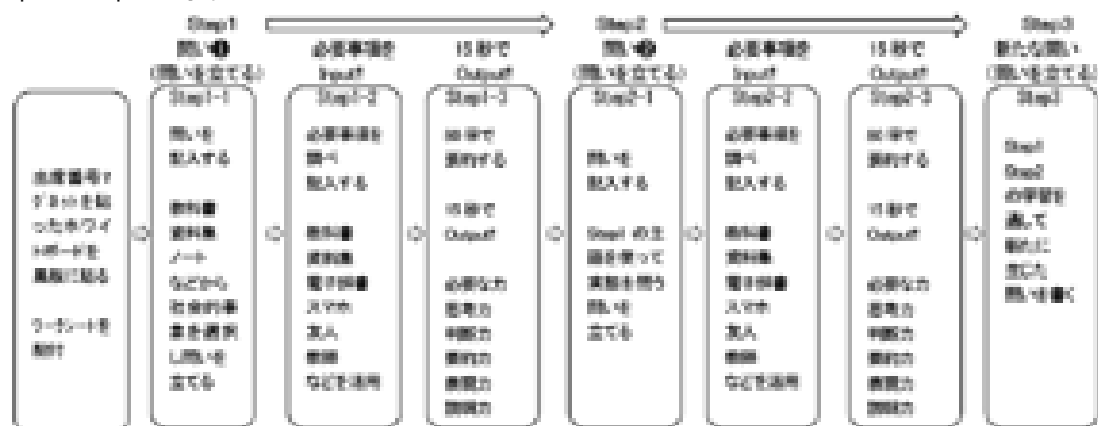
「エジプトでは、治安の悪化による観光客の激減で経済的に苦しい。リビアでは政権崩壊に乗じて、テロリストがリビアを拠点化し混乱をまねいている状況にある。」

Step3 Step1, Step2 で立てた『問い』の主語をずらして『問い』を立てる

Step1, Step2 の学習を通して自分が興味関心を持った社会的事象に対する諸問題への新たな興味関心が生じる。Step3 では、それを主語にして「実態を問う『問い』」や「更なる考えを誘発する『問い』」を立てる。

「『アラブの春』以前のエジプトやリビアの政治腐敗がどのくらいひどかったのか。」「エジプトの観光業はどのくらい財政に影響しているのか。」「リビアのテロリストの強さはどのくらいなのか。」

図1 Step1～Step3 の学習のプロセス



個別学習をより効果的に進めるため、各自の進捗状況が把握できる工夫をした。まず、黒板に図1の学習のプロセスを掲示した。そして、図1の左端に示したように授業開始時に出席番号マグネットを貼っておき、学習のStepが進むたびに各生徒が自分の出席番号マグネットを黒板の右側へ移動させていくように指示した。これで、どの生徒がどのStepで手間取っているかが把握でき、個別指導が容易になった。(巻頭のグラビア参照)

図2 ワークシートへの記入例

図2は、ワークシートへの記入例を示す。ワークシートの記入例を示す。

(3) 評価

表1 『問う力』育成意識調査結果

表中の数値は%

	よくできた	できた	少ししかできなかった	できなかった
1 知識を得られたか	56	44	0	0
2 知識を活用できたか	33	53	11	3
3 問いに答えられたか	28	58	11	3
4 問いを立てられたか	33	53	14	0
5 課題を発見できたか	42	42	16	0
6 課題を解決できたか	25	39	36	0
7 論理的に思考できたか	36	50	11	3
8 批判的に思考できたか	22	42	30	6
9 深く学べたか	47	33	20	0

ア 検証

Step1-1で立てた『問い』は、一斉授業を通して学習した内容から任意の社会的事象を選択させ、それを「なぜ〇〇は～」の形式で表現させたものであり、主体的に立てた『問い』とは言い難い。しかし、Step1-2以降の学習プロセスを通して立てたStep3の『問い』は、生徒自身の内部から湧き出た疑問を純粋に表現した主体的な『問い』と言える。前頁に記載した「アラブの春」に関連するStep3の『問い』や図2に記載したワークシートのStep3の『問い』のような疑問は、講義形式の一斉授業では生徒自身の内部から湧き出て来ることは稀であろう。表1の項目3・4・5の回答状況から8割程度の生徒が「問いを立て」「課題を発見」することが出来たと感じており、この手法を用いることにより、社会的事象に対する興味関心や探究心が高まり、主体的な課題設定が出来るようになることがわかった。

イ 今後の展開 (新たな研究仮説)

表1の項目6・8の回答状況から今後の課題が明らかになった。Step1～Step3までは個別学習で『問い』を立てたが、次のStep4からは4人程度のグループ学習を通して『問い』を立てる展開を構想した。Step3で各自が立てた『問い』を持ち寄り、その『問い』をグループ内で共有し議論したうえで『問い』を1つに絞り込み、その『問い』についてStep2～Step3と同様のプロセスで協働的・発展的に学習を進めることで、批判的思考や課題解決力を育むことが出来るだろう。

(4) 参考文献

- 荻谷剛彦(2002)『知的複眼思考法 誰でも持っている創造力のスイッチ』講談社 α 文庫
 齋藤 孝(2019)『頭のよさとは「説明力」だ』詩想社新書
 橋本 雄(2018)『歴史を探究するために「問いを立てる」訓練を』東書「ニューサート高校社会」30号

II-3 数学

(1) 研究仮説

学習した事柄をいかして問題を作成し、生徒相互に解きあう活動を行う事で、知識をより定着させると共に、数学への深い洞察と新たな疑問を見出すことができるであろう。また、数学的活動や共同作業を通じて、数学の良さを再認識し、数学への関心や意欲を高めることができるであろう。

(2) 実践

ア 実施日時：令和2年6月～12月（回数はクラスによって異なる）

イ 実施場所：各教室

ウ 参加生徒：2年文系2クラス、理系1クラス、1年2クラス、担当者3名で実践した

エ 実施内容：

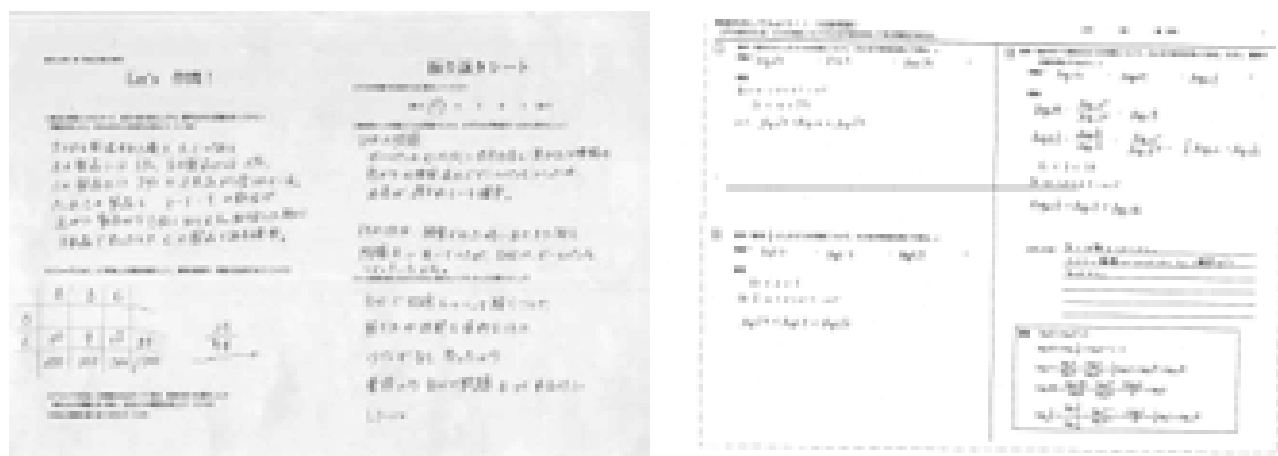
細部は実施担当者3名で異なっているが、

- ・ 生徒が自ら問題を作成する
- ・ 作成した問題を他の生徒が解く

という流れは共通している。

1年生は1時間を使って【確率】分野での実践を行った。身のまわりの事象についてその確率を求める問題を作成し、その解答を他の生徒に考えさせた。活動はグループで行い、問題を検討した。2年生は授業内において、20分程度の時間を使って、そのとき学習した単元の内容で問題を作成する作業を行った。文系は[指数関数・対数関数]の単元内で、理系は[指数関数・対数関数][ベクトル][微分法と積分方]の各単元で活動を実施した。こちらは個人での活動であるが、理系クラスでは作成した問題を隣の席の生徒に解答してもらい、意見交換をした。

以下は、それぞれの活動で生徒が作成した問題（左上：1年、右上：2年文系、左下：2年理系）である。



(3) 評価

ア 参加生徒の感想（一部抜粋）

- ・ 活動を受けて、さまざまな問題を数学的思考の観点から見つめる力が以前より養われた。（1年）
- ・ 数学に対する考え方が変わり、数学が楽しいと思えました。（1年）
- ・ ひとつの問題を様々な視点や解き方で取り組めた。（1年）
- ・ 自分で問題を作ることで問題の意味をもっと深く知れて、問題を解きやすくなり、理解が深まった。（2年理系）
- ・ これからももっと積極的に質問していこうと思う。（2年理系）
- ・ 友達とお互いに問いを出したり解き方を考えることでいくつものアイデアがでた。（2年文系）
- ・ 問題も作る上で制作者の意図が含まれるんだと感じた。（2年文系）

イ アンケート（問う力育成意識調査）回答数：１９５

	よくできた	できた	少ししかできなかった	できなかった
a-(a) 主体的に取り組めたか	24	122	38	11
a-(b) 粘り強く取り組めたか	25	120	39	11
a-(c) 積極的であったか	27	98	52	18
a-(d) 論理的に考え判断できたか	25	95	64	11
a-(f) 協働することができたか	33	115	35	12
a-(g) 自分の興味・関心の把握につながったか	27	112	44	12
a-(h) チャレンジすることができたか	20	108	52	15
a-(i) 理解状況を自覚できているか	29	119	42	5
bc-(a) 知識を得られたか	16	129	37	13
bc-(b) 知識を活用できたか	12	102	66	15
bc-(c) 問いに答えられたか	11	105	61	18
bc-(d) 問いを立てられたか	14	83	77	21
bc-(e) 課題を発見できたか	24	87	64	20
bc-(f) 課題を解決できたか	11	85	78	21
bc-(g) 論理的に思考できたか	14	99	66	16
bc-(i) 深く学べたか	25	106	46	18
d-(a) 質問できたか	9	82	65	39
d-(b) 対話できたか	17	103	51	24
e-(a) ディスカッションできたか	9	93	59	34
e-(c) 協働して問いを探せたか	15	97	58	25
e-(d) 協働して問いを深められたか	15	98	57	25
e-(e) 協働して問いに答えられたか	16	102	51	26

ウ アンケート（数学科による独自調査） 回答数：１８４～１８９

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
この活動によって数学(単元)への理解が深まった。	22	143	24	0
この活動によって数学的な思考力が深まった。	27	139	23	0
この活動によって数学への興味関心が高まった。	21	122	42	0
この活動によって数学的な新しい疑問が生まれた。	16	88	80	0

エ 考察

アンケート及び生徒の感想から、本活動によって数学的な理解を深めることができたと感じる生徒が多いことがわかった。また、協働的な活動により多様な視点から数学をとらえることができ、意欲を高めることができた。一方で「問いを立てられたか」「課題を発見できたか」「課題を解決できたか」「質問できたか」等、否定的な解答も多かった。また、「この活動によって数学的な新たな疑問が生まれた」については「あまりそう思わない」生徒が多かった。

オ 今後の課題

生徒の問題を見ても、生徒自身が【自分にとって解きやすい問題】を考えてしまい、深い洞察が必要とされるような問題を考える機会が得られてなかったように思う。今後は【解けない問題】を見つけ、これに粘り強く取り組み、協働して考察していくような活動を取り入れていく必要がある。

II-4 高校・理科

【物理科の取り組み】

(1) 研究仮説

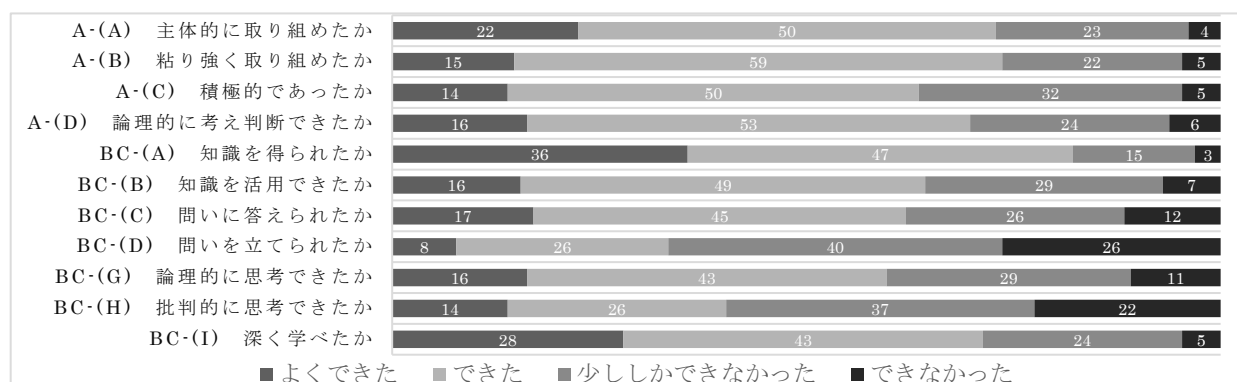
- ア 実験演示の際に、現象を理解するうえでより有効な「視点」を明示することで、現象理解には「視点」の転換が重要であることを生徒が理解し、それにより学びへの主体性が育まれるであろう。
- イ 一見対立する複数の考え方が生まれる「問い」を題材とすることで、状況を整理し現象の本質を見抜く過程から、「問う力」の要素である、自然現象を論理的に思考する力が育まれるであろう。

(2) 実践

- ア 実施時期 令和2年7月～8月
- イ 対象生徒 1学年3クラス（40名×3クラス）
- ウ 実施方法 普通教室での演示実験に「問い」を取り入れた授業を実施する
始めに「問い」に対する自分の考え方を複数の選択肢から挙手で選ばせる。
それぞれの考え方について、なぜそう考えたのかを発表させ議論する。
演示実験により現象を確認し、定性的に現象を整理する。
最後に、公式等を用いて立式・解法し、定量化する。
授業実施後に「問う力」についてのアンケートを googleform で行う。
- エ 実施内容 1学年 物理基礎より
- ①運動方程式の利用
2物体間で相互に作用する力の関係を題材とする。2台の力学台車を連結し運動させ、台車の質量を変えることで連結部分にかかる力の大きさがどのように変化するかを「問う」。その際、連結部分に指人形を挟み「指人形が一番苦しいのはどんな条件か」を問うことで、現象を理解するうえで注目すべきポイントを明確にする。
- ②浮力
大気中で風船にかかる重力、浮力、風船の中の空気にかかる重力のつり合いを題材とする。直径1m弱の風船をふくらませ、空気の入っていない風船と天秤で重さを比較すると、どちらが下がるかを「問う」。

(3) 評価

- ア アンケート（問う力育成意識調査）回答数：119 表中の数値は%



- イ 考察
多くの生徒が主体的に・粘り強く取り組むことができ、論理的に考えようとする姿勢が見られた。
反面、知識の活用や問いを立てること、批判的に思考することについて課題が見られた。
- ウ 課題
演示実験や「問い」を工夫することで、生徒が主体的に、かつ論理的に考えることの助けにはなるが、自ら問いを立てることや批判的に考えることへはつながらない。自ら「問う」姿勢や批判的思考力を高めるためには、さらなる工夫が必要である。

(4) 参考文献

- エドワード・F・レディッシュ著 日本物理教育学会監訳（2003著 2012訳）
『科学をどう教えるか：アメリカにおける新しい物理教育の実践』丸善出版
川角 博（2014）『考えるカラス 「もしかして？」からはじまる楽しい科学の考え方』NHK出版

【化学科の取り組み】

（１）研究仮説

実験実習を中心とした理科の様々な領域の学習活動を行うことで、科学に関する基礎的な知識や基本的技能が身につくとともに、科学に対する広い視野や科学的素養を育むことができるだろう。

また、データ処理及びレポート作成を行うことで、今後の課題研究で必要となる情報処理の知識・技能も身につけることができるであろう。

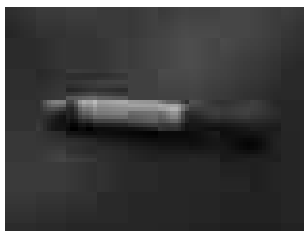
（２）実践

日々の「授業の組み立て」について、１つの例を紹介する。①日常生活における現象の確認、②今までに学んだことの確認、③原理や考え方の確認、④問題演習の順に展開していく。その際に、生徒への「問い」の形としては、順に①「何が起きているのだろうか」「どのような現象だろう」、②「今までに学んだ中でどの現象だろう」イメージさせる、「どのような現象に似ているだろう」つながりを考えさせる、③「どのような原理だろう」「どのように考えたら良いだろう」、④問題によって、①～③を使い分けながら、繰り返し質問していくという流れである。

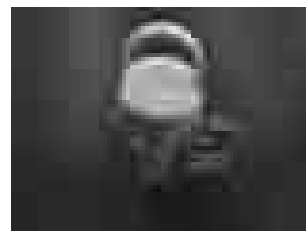
授業の導入で日常生活における現象について、生徒に考えさせている。例えば、気体の溶解度について、炭酸飲料を例に説明した。ヘンリーの法則について、「炭酸を逃がしま栓」を例に説明した。減圧沸騰について、「ペチャンコポンプ」を例に説明した。融解熱について、「冷んやり水筒」を例に説明した。



炭酸を逃がしま栓



ペチャンコポンプ



冷んやり水筒

また、生徒の「問う力」を育てるために、ICT 機器を用いて授業を展開している。例えば、実験の様子を教員の chromebook で撮影し、生徒の chromebook に映像を転送した。生徒たちは、実験の様子を間近で観察することがたちで共有することができた。

そして、実験のワークシートを工夫し、思考力、判断力、表現力を養うような工夫を取り入れた。例えば、測定値や計算値を元にグラフを作成できるよう方眼紙をワークシートに挿入した。方眼紙の目盛りは与えておらず、測定値や計算値から自分で目盛りの間隔を考えさせた。



（３）評価

身近で起こりうる現象を生徒に演示し、体験させることで、自分事として捉えることができ、たくさんの「問い」を立てることができた。

実験を行う際に chromebook を活用することで、映像の共有だけではなくチャット機能での生徒同士でディスカッションや、教員への質問とその回答の共有がオンタイムでできた。「問う力」だけでなく、他者と協働するコミュニケーション力も育てることができた。

あえて不完全なワークシートを用いること、より深く思考することができ、生徒たちからたくさんの考察と「問い」を得ることができた。授業内容やワークシートを工夫することは、生徒たちの「問う力」は育む上で有効だと思われる。

II-5 保健体育科

(1) 研究仮説

本研究では、目標タイムの設定とそれに向けたレースプランを組み立てて持久走の授業を展開した。またレース後の評価として、客観的運動強度尺度である心拍数を計測して振り返りを行うようにした。目標タイムを設定し、そのレースプランを立てることでペースを維持して走ったり、ペースの変化に対応して走ったりすることを、より意識して走ることができる考える。また客観的運動強度尺度である心拍数から体への負荷を考え、レースプランを見直し、次回の目標設定をすることで、意欲向上につながると考えられる。したがって、この学習を通して目標達成に向け挑戦する力や「問う力」を養うことができるであろう。

(2) 実践

ア 実施日時 令和2年12月

イ 実施場所 学校下農道

ウ 参加生徒 2年B・E組 男子44名

エ 実施内容

1周1.6Kmの持久走コースを3周走る。目標ゴールタイムとそれぞれの周回での目標通過タイムを設定してレースプランを立て、意識して走る。スタート前とゴール後に脈拍を測定し、客観的運動強度尺度とする。ゴール後はワークシートに結果を記入し、結果や感想、客観的運動強度尺度を元に次回のレースプランを組み立てる。

オ 指導案（5/8時間目）

時間	生徒の学習活動	指導上の留意点・評価点
10分	・脈拍数測定 ・準備体操 ・アップを兼ねながら持久走コースへ移動	・安静時脈拍の取り方の指導。 ・持久走を安全に実施するための注意事項の確認 (生徒の体調確認、走行時の怪我の注意、一般の人への配慮等)。 ・安全に配慮し持久走コースへ移動。
35分	・目標タイムごとにスタート位置に並ぶ ・4.8kmのコースを走る ・ゴール後すぐに脈拍測定 ・ワークシートの記入	・コースを逆走し、体調の悪い生徒がいないか様子を確認する。 ・ゴール後タイマーを見て脈拍測定をするように促す。 ・自己の反省ができていないか声掛けして確認する。 ◎目標設定タイムの達成に向け、意欲的に活動することができる。 (関心・意欲・態度) ◎目標設定タイムを意識し、自己に適したペースで走ることができる。 (知識・理解) ◎結果を振り返り、適切な次回の目標タイムを設定し、レースプランを立てることができる。 (思考・判断)
10分	・各自で整理運動 ・ダウンを兼ねながら学校へ移動	・安全に配慮し学校へ移動。 ・体調不良者がいないか確認する。

(3) 評価

ア 参加生徒の感想（一部抜粋）

- ・ペースを一定に保つことができた。この調子でペースをあげる。
- ・1周目の後、ペースを上げられなかった。入りをもう少し抑える。
- ・プラン通り後半ペースを上げることができた。
- ・ペースメーカーを見つけたので、少しペースが速くなった。

イ 考察

今回の持久走では目標タイム設定からレースプランを立て、ペースを意識することで、意欲的に活動し自己ベストを更新する生徒が多かった。また、生徒の感想にもあったが、自分のレースプランに近い人や少し速い人を見つけ、それに合わせたり、目標にしたりするといった生徒の工夫も見られた。全体を見ても目標タイムを設定し、ペースを意識することで「がんばることができた」「ゴールまであきらめずに走れた」など肯定的で意欲的な感想が90%以上見られた。仮説で立てた意欲の向上にはつながったと考えられる。

また客観的運動強度尺度として心拍数測定を用いたことでレースプランが自己の体力に見合っているのか、客観的に見ることができレースプランの見直しに役立った。目標タイム達成の有無にかかわらず、心拍数から目標タイム設定を見直した生徒が全体の70%程度と高かった。レースプランの工夫や自ら考えることにつながったと考えられる。

今回の学習を通して、活動の意欲向上や目標達成に向け挑戦する力、問う力を養うことの一端になったのではないかと考える。

ウ 今後の課題

学習を通して、生徒たちは活動全体を捉え、自己の体力やペース配分などを考えレースプランを考えることができた。また、そういったことを意識することで意欲的に活動に取り組むこともできた。今後はより目標タイムを高く設定することができたり、楽に目標タイムを達成できたりするように、走り方のフォームや呼吸法など多岐にわたった指導を組み込み、生徒それぞれが自己に合った走り方を工夫できるようにしていく。

そういったことがさらに生徒の活動への意欲向上や目標達成に向け挑戦する力、「問う力」を養っていくために重要であると考ええる。

(4) 参考文献

高等学校学習指導要領解説 保健体育編

II-6 高校芸術科

(1) 研究仮説

本時の成果を意識して「次時への課題（次時への問い）」を考えることで、「本時の目標（本時の問い）」を明確にすることができ、論理的に考え協働して練習に臨めるであろう。

(2) 実践

ア 実施日時

令和2年12月から令和3年1月

イ 実施場所

音楽教室

ウ 参加生徒

第1学年3クラス 音楽選択者

エ 実施内容

器楽の授業でトーンチャイム合奏を行うにあたり、「本時の目標」「本時の考察」「次時への課題」を明確にして（資料1）練習を行った。何となく練習をするのではなく、グループ全体で前時の課題を再確認し、本時の目標を設定してから練習に入ることを徹底した。練習終了後は本時にできるようになったことを振り返り、次時への課題を見つけることで、毎時間が繋がりのあるものとなるようにした。

資料1ワークシート

目標	次時への課題	次時への問い	次時への目標
1/4	トーンチャイム合奏の練習	トーンチャイム合奏の練習	トーンチャイム合奏の練習
2/4	トーンチャイム合奏の練習	トーンチャイム合奏の練習	トーンチャイム合奏の練習
3/4	トーンチャイム合奏の練習	トーンチャイム合奏の練習	トーンチャイム合奏の練習
4/4	トーンチャイム合奏の練習	トーンチャイム合奏の練習	トーンチャイム合奏の練習

指導計画（12時間扱い）

第1次	1時間	クラス全体でトーンチャイム合奏の体験
第2次	3時間	グループ編成・曲決め（1時間） 楽譜作り（2時間）
第3次	7時間	グループ練習（7時間）
第4次	2時間	発表（2時間）

(3) 評価

ア 考察

音楽では「問い」という言葉を使わず、「次時への課題」として実践を行った。個人レベルで授業を見直し次の課題を見出すのは難しい生徒もいるため、グループで話し合うことで具体的な課題を見つけるられるようにした。本時では前時の課題をもとに「本時の目標」を設定して、毎時間目標をもって主体的に練習に取り組めるようにした。

本時の成果を意識して「次時へ課題」を具体的に考えられた生

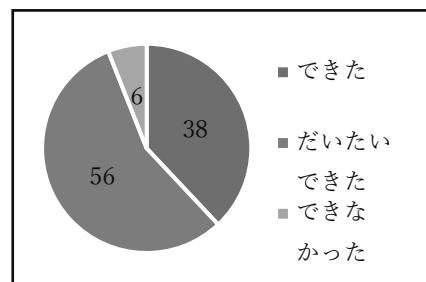


図1「次時の課題」を具体的に考えることができたか

徒は、「できた」と「だいたいできた」を合わせると 94% (図 1) であり、「前時の課題」をもとに「本時の目標」を具体的に考えられた生徒は、「できた」と「だいたいできた」を合わせると 93% (図 2) である。ほぼ全員がグループ活動の中で課題や目標 (問い) を設定することができたことが分かる。また、「本時の目標」を意識して練習に取り組むことができた生徒は、「できた」と「だいたいできた」を合わせると 94% (図 3) であり、グループ活動の中では目標 (問い) を意識して練習できたことが分かる。資料 2 は「本時の目標」を意識して練習に取り組んだ内容についてアンケートをとったものを図 3 の項目毎にまとめたものである。「本時の目標」を意識して練習に取り組むことができた (だいたいできた) 生徒は、効率良く練習でき、お互いに協働して練習に取り組み、成果を実感していることが分かる。

以上のことから、本時の成果を意識して「次時の課題」を考えることは「本時の目標」を明確にすることに繋がり、論理的に考え協働して練習に臨めることが分かり、有効な手段であったと考察できる。「できなかった」生徒からのコメントより、より具体的な目標を立てること、毎時間「本時の目標」について意識するように声掛けすることが重要であると考えた。

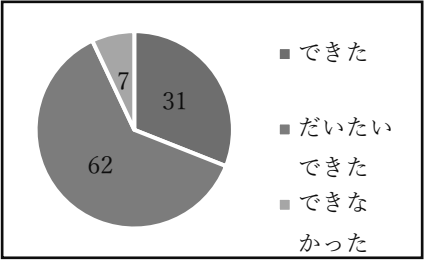


図2「本時の目標」を具体的に考えることができたか

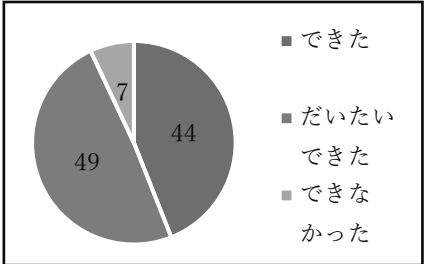


図3「本時の目標」を意識して練習できたか

資料2「本時の目標」を意識して練習に取り組んだことについて

できた(44%)	だいたいできた(49%)	できなかった(7%)
○目標を達成するためにどうしたらよいかをリーダーを中心に通しの合間に話し合いながら練習した。 ○前回の課題を踏まえた目標のため達成するために意識して練習できた。 ○最終的にできなかったことを次回の目標にしたので効率のよい練習だった。 ○自分だけで考えるのではなくグループのみんなで指摘しあって目標を達成できるようにした。	○本時の目標を利用して並び方を変えたり、リズムの取り方を変えたりした。 ○おおまかでも目標があると実力に合わせて目標の内容も向上していったので、練習の成果がわかりやすい。 ○最初にグループで共有し、それが達成できたらレベルを上げ、無理なときに下げたり、そのまま続けて練習した	○楽譜を追うことに熱中するあまり意識外になってしまった。 ○漠然とした目標だったため、できなかった。 ○なんとなく始まって、通す中で課題をみつけていった。

II-7 高校・英語科

【2 学年の取り組み】

(1) 研究仮説

Question Making や Critical Reading で批判的に本文を読む練習をさせていくことで「問う力」を育成することができるだろう。

(2) 実践

ア 実施日時：通年 イ 実施場所：教室 ウ 参加生徒：2 学年全生徒

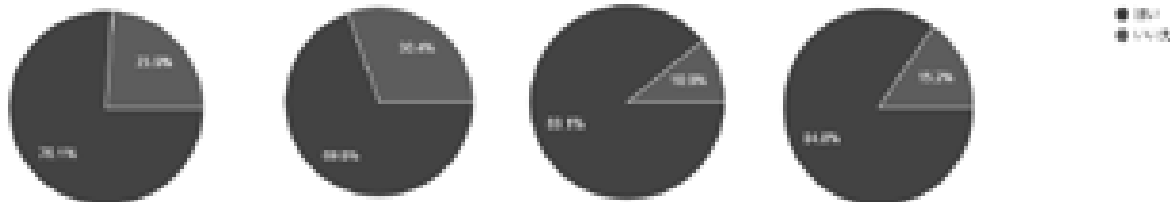
エ 実施内容（1 コマ 55 分の授業の流れ）

- ・イントロダクションとして絵や写真を見せながら内容の導入
Debate Practice や Essay Writing への伏線として、あるトピックについて考える。
- ・ワークシートを元に授業を進めていく。2 つのセクションごとに以下のように進めていく。
 - ① Comprehension Check (教科書掲載の内容確認問題に答える。)
 - ② Question Making (オリジナルの内容確認問題を作成し、質問しあう。)
 - ③ Critical Reading (本文から、答えのない質問を考えて話し合う。)
 - ④ Target Expressions (本文中の文法事項を使ってオリジナルの例文を作る。)
 - ⑤ Retelling (日本語穴埋め形式の Outline、絵、キーフレーズを見て内容を振り返る。)
 - ⑥ Debate Practice (本文に関連したトピックについて立論、質問、反論までを行う。)
 - ⑦ Essay Writing (⑥と同じトピックについて書く。)

(3) 評価

ア 授業中の以下のタスクで批判的思考力・問う力が向上したとを感じるか(生徒アンケートより)

・Question Making ・Critical Reading ・Debate Practice ・Essay Writing



イ. 考察

レッスン最初のイントロダクションや Critical Reading、Debate Practice を通じて既存の知識と授業を通して学んだ内容に関連付けさらに深い理解を目指している。ライティングやスピーキングにおいて反復して活動を行うことで生徒にとってはハードルが低くなってきた。より短い時間で取り組めるようになっている。「問う力」という観点からは、Question Making や Critical Reading で批判的に本文を読む練習をさせており、生徒の「問う力」は向上していると感じる。アンケート結果からもそのことはうかがえ、生徒たちの多くからもこの実践が好意的に受け止められており、この仮説が正しかったと言えるだろう。また、最終的にディベートの試合へとつなげていく過程で多角的に物事を考える姿勢も身についてきたと感じる。

ウ. 今後の課題

- ①ペアやグループでの活動において、生徒同士の能力差や積極性の差によってうまくいかない場合がある。
- ②文法指導や和訳指導を求めている生徒にとって、批判的思考力を必要とするコミュニケーション活動の効果や意味に対する疑問があるように思われる。
- ③accuracy と fluency のバランスをどうとっていくのか。
- ④評価基準をどのように決めるか。（「問う力」の定義、何ができれば客観的に「問う力」がついたと言えるのか。）

【1学年の取り組み】

（1）研究仮説

授業中に十分な質疑応答の時間を作ることによって、質問に教師が答えることを授業の中心にすれば、生徒の「問う力」を育成することができるだろう。

（2）実践

ア 実施日時：通年 イ 実施場所：各家庭及び教室 ウ 参加生徒：1 学年全生徒

エ 実施内容（1 コマ 55 分の授業の流れ）

1 文 1 文の読みは、解説動画を見ておくことで、各自必要に合わせて確認が行えるという前提で進めている。

（1 文 1 文の読みについての解説は、全てのレッスンで youtube にあげてある。）

①新出単語の音読；フラッシュカードによる瞬発力（日→英）

②前時の復習：リプロダクション活動もしくは要約文の口頭英作文

③本時の読解 1. 段落ごとに 2. 黙読（40 秒～1 分） 3. ペアで確認 4. 質疑応答（「問う力」育成） 5. 音読活動

④パートについて英問英答

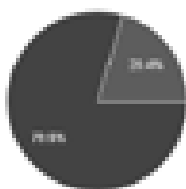
⑤リプロダクション活動もしくは要約文の口頭英作文

（3）評価

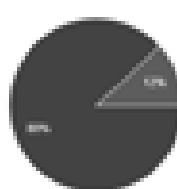
ア 生徒アンケート結果

CE1 の授業で「疑問を生み出す力」は向上したと思うか

質疑応答中心の授業は「問う力」の育成につながると思うか



■ 思う
■ 思わない
■ わからない



■ 思う
■ 思わない
■ わからない

イ 考察

生徒のアンケートからは、8 割の生徒が自分の「疑問を生み出す力」が向上したと答え、質疑応答中心の授業が「問う力」の育成につながると回答した。ただし、教員側は「授業中に手が上がるかどうか」でしか普段は評価できていない。「質問力」という意味では、紙に書かせれば質問はもっと出ると思われるが、他の生徒の前で手を挙げる「たくましさ」の育成が難しい。指名すれば質問は出るようである。

ウ 今後の課題

①質問がたくさん出る時と出ない時がある。いつも同様の 5、6 名の生徒であると感じる。

②積極的に全員が質問する学習集団の育成。

③「問う力」の定義が人によって異なる。

④「問う力」の評価は、アンケートを行っているが現在のところ生徒の感覚的なものでしかない。

（4）参考文献

内田浩樹（2015）『Dictogloss を授業に取り入れよう！』ジャパンライム DVD

Carrell、 P. L. (1984). Schema theory and ESL reading: Classroom implications and applications. The modern language journal、 68(4)、 332-343.

Hudson、 T. (2007). Teaching second language reading. Oxford: Oxford University Press.

小林翔（2017）『高校英語のアクティブ・ラーニング 成功する指導技術&4 技能統合型活動アイデア 50』明治図書

Lynch、 T.、 & Maclean、 J. (2000). Exploring the benefits of task repetition and recycling for classroom language learning. Language Teaching Research、 4(3)、 221-250.

MacIntyre、 P. D.、 Clément、 R.、 Dörnyei、 Z.、 & Noels、 K. A. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. The Modern Language Journal、 82(4)、 545-562.

松本茂. (1996). 頭を鍛えるディベート入門: 発想と表現の技法. 講談社.

佐々木啓成(2020) 『リテリングを活用した英語指導』大修館書店

田中武夫・田中知聡 (2018) 『英語授業の発問づくり』明治図書

寺島隆吉 (2019) 『レポートの作文技術』あすなろ社

II-8 高校・家庭科

(1) 研究仮説

本校では、アルバイトは禁止しており、自立の一つである経済的自立を生徒は全くしていない。自分で使用できるお金は、お小遣いや、必要な時に必要な金額をもらえるという家庭がほとんどである。そのような恵まれた環境下にあるため、お金に対しての関心が低く、自らが将来お金を稼ぎ増やすことについて自分事として捉えている生徒はほぼいない。

しかしながら、ほぼ全員が大学へ進学し、大学卒業後等にリーダーとなったり、起業したりする可能性が高い本校生が、金融等に関する知識を身に付けておくことは必須であると考ええる。

また、お金は湧いてくるものではなく、働いて得られる対価であることを深く認識させることで、お金に関する関心が高まるだけでなく、保護者に対する感謝の気持ちも得られるであろう。

更に人生のリスクも学ぶことで、その際にお金がどのように関わってくるかを知るだけでなく、自分がどのようにお金について関わっていくのかを今までとこれからの人生の両方の視点で考えさせることができ、自分自身に「問う力」が身についていくだろう。将来を思い描くだけでなく、投資を学ぶことでリスクヘッジの考え方もライフプランに取り入れることができるであろう。

また家庭科の「生活に直接関与する視点」の特質を生かし、人生に正解はなく自分の性や周りの考えに囚われることなく、人生設計をすることができるように、経済や金融を含めた多様な視点から社会問題を眺め、思考し判断することで、自分が今何をすべきなのか、自分なりの答えを導き出すことができるようになり、「問う力」の多様な要素が育成できるであろう。

(2) 実践

ア 実施日時 6月から7月

イ 実施場所 2年生各クラス

ウ 参加生徒 第2学年7クラス

エ 行程 家庭基礎消費生活分野 全6時間扱い

オ 実施内容

<前半4時間>生活における経済の計画（お金の視点から将来を考える）

1 時間目／マネープランゲーム①

2 時間目／マネープランゲーム②

（人生とお金の関わり方について理解する、将来と現在の家計のマネジメント）

3 時間目／人生におけるリスクや社会保障等の仕組みを知る

4 時間目／お金の視点から人生を設計する（育休・ワークライフバランス・コロナ離婚、給与明細の読み方・日本経済と為替・国際経済）

<後半4時間>消費行動と意思決定（消費者として）

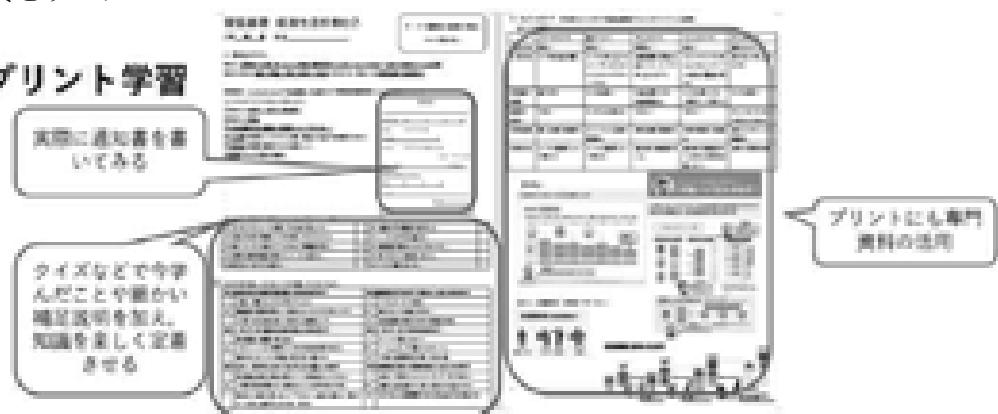
1 時間目／消費者の権利と責任について法律を理解する（契約とトラブル、クレジットカード、多重債務、ローン）

2 時間目／様々な情報媒体から適切な情報を取捨選択する
（新型コロナウイルスと情報リテラシー）

3 時間目／一人暮らしの家計管理

4 時間目／投資とリスク

自主作成のプリント学習



(3) 評価

ア 参加生徒の感想（一部抜粋）

<保険>

- ・今まで将来設計について考えたことはなかったが、意外と人生は短いことがわかった。保険に入る大切さを学ぶことができた。
- ・保険に入ることによってリスクを軽減できるから、子どもが生まれたあとや老後など、状況に合わせて保険を見直す必要があると思った。
- ・いつ自分に何が起きるか分からないし、保険に入っていないことで家族に大変な思いをさせてしまうかもしれない。貯金はその時にお金が増えているなければ意味がないし、自分も親が計画してくれていたことで安心した生活ができていることがわかった。
 - ・保険などは自分に関係のないことだと思っていたけど、成人になるまであと数年しかないのだから、自分が損することのないように見極めが必要だと思った。

<投資>

- ・投資は思っていたより良さそう。
- ・ギャンブル性が強くて怖いので私はやらない。

<貯蓄>

- ・自分を育ててくれている親は養育費で貯蓄マイナスが大きいのだから親孝行しようと思う。
- ・早めの死は老後の貯蓄をあまり考えなくて済むから良いかもしれない。
- ・65歳から90歳まで35年あり、その間長い年金生活があるため、年金と貯金で生活できるように働き盛りの時にお金を貯める。

<情報>

- ・インターネットの情報はデマであることも多いので、鵜呑みにせず、自分で考えていかなければならないと思った。

<ライフプラン>

- ・世の中の仕事で、肉体的に性差がありできないこと（妊娠や出産、重いものを持つ等）もあるが、多くは男女平等に行えることがわかった。自分も家事・育児に参加したいし、家事を全般的にやってくれている母親には感謝しようと思った。
- ・イクメンという言葉が存在していること自体が間違っていると思った。女性は出産で一時キャリアを離れるときもあるかもしれないが、それは社会や男性が当たり前のように入力して、男性も女性と同様の時間、育児休暇を取得しなければならないような制度を作るべきだと思う、それが、日本経済の発展にもつながっていくはず。

イ 考察

年度の始めにライフプランを書かせ、経済の勉強後に自分の書いたものに加筆・修正させた。年度当初は将来と自分を結び付けて考えることができず、ライフプラン表の中が空欄の生徒がほとんどであった。しかし、経済の勉強後に修正をさせると、多くの生徒が具体的な内容を加筆することができていた。

今年度は、時事問題を踏まえて生徒自身に考えさせる時間を多くとることができた。実生活に即した内容、特に本年度は新型コロナウイルスが自分たちの生活にも直接的に影響したこともあり、自分と経済生活を結び付けて考えやすかったようである。

現代の子どもたちはスマートフォンで自分に必要または興味関心のある情報のみを選び読んでいることが分かった。新聞やテレビのニュース、雑誌なども時として必要な情報を集めるためには有効であることを理解させることができた。

ウ 今後の課題

投資は運＝ギャンブル性が高いという印象を生徒に与えてしまった。投資も日本や国際経済を勉強していくことでうまく活用できることを自分自身も勉強していく必要があると感じた。経済の勉強は政治経済や数学とも内容が重なる部分があるので、他教科と連携しながら横断授業をしていくことで、知識をより深めるだけでなく、その知識をどのように活用できるのか知ることができる。それによって、自分の身に着けている知識が横断的に活用できるようになっていくだろう。

II-9 附属中の授業

(1) 研究仮説

中学校第1学年英語科において、コミュニケーションを図るために必要な資質・能力を五つの領域においてバランスよく指導し、4技能統合型の言語活動を計画的に設定することで、「問う力」の一部である、英語によるコミュニケーション能力の育成を図ることができるであろう。

また、授業において即興で考え、話したり書いたりする言語活動を継続して行うことで、英語によるディベートやディスカッション、プレゼンテーションなどを行う上での基本的な資質・能力を育成することができ、「問う力」の向上となるであろう。

(2) 実践

ア 対象生徒 附属中学校第1学年

イ 単位数 6単位

ウ 授業における指導方法および内容

5単位をJET2名、1単位をJETとALTによるTTで実施した。身に付けさせたい資質・能力は1単位時間に身に付くものではなく、単元や年間を通して育成できるものとして、以下の言語活動を継続して実施した。どの活動においてもインプット・インテイク・アウトプットのスパイラルを重視し、繰り返し学習する場を設定する。各単元において、バックワードデザイン(逆向き設計)の考えのもとで学習到達目標を明確にし、Can-Doリストとルーブリック評価を生徒に提示することで、生徒が見通しをもって学習を進めることができるようにする。

(ア) スモールトーク : Small Talk

授業のはじめにペアワークもしくは3人組でスモールトークを行う。教師が提示した日常的な話題や社会的な話題について1分間会話し、即興で自分の考えなどを伝え合う。その際に既習事項を活用させながら、日常的な話題を単元の学習内容と関連付ける。中間指導を行うことで、既習表現を想起させたり、未習表現を導入したりし、実践的なコミュニケーション能力の育成を図る。また、生徒が身近に感じる話題を提示することで、コミュニケーションに対する関心・意欲を高める。

(イ) ワードカウンター : Word Counter

スモールトーク同様に、授業のはじめにワードカウンターを行う。教師が提示した日常的な話題や社会的な話題について即興で自分の考えをまとめて相手に伝える。ペアの相手は1分間で発話した単語の数を数え、その数を記録していく。誤った表現や理解できない表現があった場合は互いに確認させ、気づきや新たに学んだことを次の学習につなげさせる。

(ウ) リテリング : Retelling

教科書の本文や単元に関連した英文を読んだり聞いたりして、内容をその場で理解し、自分の言葉を使って即興で相手に30秒間で伝える。リテリングする際には、文章全体を大まかにとらえさせ、要点をつかむことができるように指導する。単元のまとめの活動として、単元全体もしくは関連した長い英文を読んだり聞いたりして、その内容をリテリングすることで、情報を素早くインプット、インテイクしたものを正確にアウトプットできるようにする。

(エ) サマライズ : Summarize

毎単元において、リテリングで伝え合った内容や読んだり聞いたりした内容を自分の言葉で英文にまとめる。書いた英文はペアで読み合い、内容について英語で確認する。自分の英文を振り返ることで、表現の間違いや疑問点、考えの変化などに気付くことができる。サマライズした内容をもとに、プレゼンテーションなどのパフォーマンス課題へつなげていく。

(オ) Can-Do リストの提示

授業をバックワードデザイン(逆向き設計)の考えのもとで計画し、3年間のCan-Doリストと照らし合わせながら授業内容と言語活動を設計していく。毎単元の最初の授業において、その単元のCan-Doリストを提示し、学習到達目標を明確にする。単元ごとのゴールの姿を示すことで、生徒は学習の流れと活動の意味を理解し、主体的に課題に取り組むことができる。また、各単元の導入から終末、さらに単元間の言語活動につながりをもたせ、言語材料を繰り返し使用させることで学習内容の定着を図る。

Can-Do List for Ryugasaki 1st JHS (R02)			
Category	Level 1	Level 2	Level 3
Listening	Can understand short messages and announcements.	Can understand short messages and announcements.	Can understand short messages and announcements.
Speaking	Can introduce oneself and others.	Can introduce oneself and others.	Can introduce oneself and others.
Reading	Can understand short messages and announcements.	Can understand short messages and announcements.	Can understand short messages and announcements.
Writing	Can write short messages and announcements.	Can write short messages and announcements.	Can write short messages and announcements.
Grammar	Can use basic grammar.	Can use basic grammar.	Can use basic grammar.
Vocabulary	Can use basic vocabulary.	Can use basic vocabulary.	Can use basic vocabulary.
Comprehension	Can understand short messages and announcements.	Can understand short messages and announcements.	Can understand short messages and announcements.
Production	Can produce short messages and announcements.	Can produce short messages and announcements.	Can produce short messages and announcements.

(カ) ルーブリック評価

単元内でパフォーマンス評価の場面を設定し、ルーブリック評価を用いて学習到達目標の達成度を測る。ルーブリック評価の基準については、グッドモデルとバッドモデルを示しながら、生徒へ単元ごとのゴールの姿を示し、生徒と確認をしながら決定していく。右の表は後述の『輝け！私たちの未来「探究プロジェクト」イングリッシュ・スタディ』で活用したものである。生徒は Google Forms を用いて自己評価を行った。

Today's goals			
Can make a presentation.			
Can listen to other presentations and ask questions.			
Category	Level 1	Level 2	Level 3
Listening	Can understand short messages and announcements.	Can understand short messages and announcements.	Can understand short messages and announcements.
Speaking	Can introduce oneself and others.	Can introduce oneself and others.	Can introduce oneself and others.
Reading	Can understand short messages and announcements.	Can understand short messages and announcements.	Can understand short messages and announcements.
Writing	Can write short messages and announcements.	Can write short messages and announcements.	Can write short messages and announcements.
Grammar	Can use basic grammar.	Can use basic grammar.	Can use basic grammar.
Vocabulary	Can use basic vocabulary.	Can use basic vocabulary.	Can use basic vocabulary.
Comprehension	Can understand short messages and announcements.	Can understand short messages and announcements.	Can understand short messages and announcements.
Production	Can produce short messages and announcements.	Can produce short messages and announcements.	Can produce short messages and announcements.

- エ 実施日時 令和2年10月20日
 オ 実施場所 飛龍館2階
 カ 実施内容 『輝け！私たちの未来「探究プロジェクト」イングリッシュ・スタディ』

5校交流の場の設定とコミュニケーション能力・プレゼンテーション能力の育成をねらいとし、令和2年度5校連携事業の一環で実施した。各校でALTとのアイスブレイクでは、ゲーム要素の多いコミュニケーション活動を行った。5校交流のプレゼンテーションでは、「学校紹介・地域紹介」をテーマに各校4つのグループに分かれて発表と質疑、進行などをすべて英語で行った。

(3) 評価

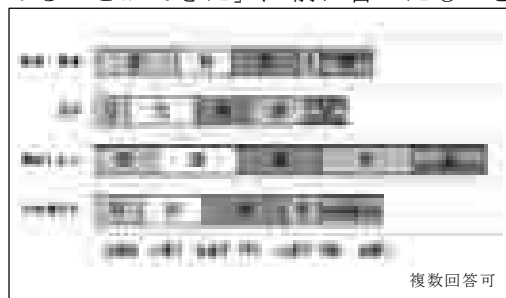
- ア 授業に対する意識調査の結果（1月13日実施 附属中1年40人 男子20人 女子20人）

1月に実施した生徒の意識調査の結果から、五つの領域において半数以上の生徒が「読むこと」と「話すこと（やり取り）」が好き（得意）であるということが分かった。苦手と感じている領域については、およそ半数の生徒が「書くこと」、「話すこと（やり取り）」、「話すこと（発表）」と回答した。今年度伸ばすことができたと感じる領域は「書くこと」と「話すこと（やり取り）」が多く、「話すこと（発表）」が最も少なかった。これから伸ばしたい力として「話すこと（発表）」をあげる生徒が最も多かった。

ワードカウンターにおいては、年間平均語数が53.5語であった。年度当初の平均語数が25.3語であったの対して、1月時点では最も多かった語数が79.6語にまで伸びた。5月から1月にかけて54.4語増やすことができた。生徒の感想の中にも「具体的な数字が見えて話す力が伸びている

のを感じる」といった回答も多数見られた。

ほとんどの生徒が3年間を通じた Can-Do リストや各単元の Can-Do リストと学習到達目標を意識して学習を進めていることも分かった。生徒は授業の感想として、「見通しをもって学習を進めることができた」や「前に習ったものを次の学習につなげることができた」などと回答していた。



複数回答可

WC 年間平均数	WC 年度当初数	WC 最多数(1月)	5月～1月増加数
53.5 語	25.3 語	79.6 語	54.4 語

Q. Can-Do リストや目標意識して学習していますか	人数
とても思う	14 人
どちらかというと思う	21 人
どちらかというと思わない	3 人
あまり思わない	2 人

イ 『輝け！私たちの未来「探究プロジェクト」イングリッシュ・スタディ』における生徒の自己評価と感想（一部抜粋）

生徒は事後アンケートとして、ループリック評価による自己評価と感想を Google Forms を活用して回答した。発表する際の声や目線、態度など概ね良好だったことが分かった。オンラインによる質疑応答に関しては、受け答えが難しかったと感じている生徒がいた。全体的には、ほとんどの生徒が ALT とのやり取りやプレゼンテーションを楽しかったと回答していた。



評 価 項 目	A	B	C
Loud voice & Clearness	36	4	0
Eye contact & Gesture	28	12	2
Answer	24	9	7
Attitude	26	13	1
Questions	15	22	3

＜生徒の感想＞

- ・ ALT の先生たちともっと話したかった。話す力をさらに伸ばしていきたい。
- ・ 初めて会う人と話すことで自分の知らない単語や表現に触れられてとてもいい経験だった。
- ・ 質問されてもその場で考えて、すぐに英語で答えられたので良かった。
- ・ 同じグループの友達と協力して発表できたことがうれしかった。原稿なしでできた。
- ・ もっと積極的に伝えたり質問したりしたかった。来年度への課題としたい。
- ・ 言葉で直接自分の考えや情報を伝えることが大切だと分かった。これから会話を頑張りたい。

ウ 考察

スモールトークやワードカウンターなど毎時間始めのルーティン活動として行っている言語活動が生徒のコミュニケーション能力の育成に効果的であったと考える。生徒は身近な話題や社会的な話題について意欲的に会話することができた。ワードカウンターの語数もすべての生徒が増やすことができ、生徒は皆自分の成長を感じることができている。リテリングやサマライズに関しては難しいと感じている生徒も多くいるため、今後も内容を精選し、継続して取り組む必要がある。Can-Do リストや学習到達目標、ループリック評価の提示については、生徒が見通しをもって学習できるようにするために有効であった。生徒は各単元で何をどのようにできるようにしなくてはならないか、またどういった場面で活用する必要があるのかを理解して学習を進めることができた。さらなる効果的な指導を目指し、年間指導計画を含めて来年度に向けて指導内容のバランスを見直したい。

（４）今後の課題

現状として生徒の中に学力差が生まれつつある。英語を苦手と感じたり、コミュニケーションをとることが得意ではなかったりする生徒に対して個別の支援と手立てを講じる必要がある。また、中高6年間を見通したゴールを設定し、指導内容・活動内容を再考していく必要がある。

（５）参考文献

文部科学省．【外国語編】中学校学習指導要領（平成29年告示）解説